

アジアにおけるポルトガル語とその文化の継承

－ マラッカの言語 Kristang 語¹ －

富盛伸夫

東京外国語大学

要旨：本稿では、アジアに渡来し定着したポルトガル人たちの残した Heritage と Legacy について、ケーススタディーとしてのマレーシア・マラッカ地域に現在まで伝えられる Kristang 語とその周辺について概観する。はじめに Kristang 語研究の契機となった経緯を簡潔に記し、その形成の背景とプロセスと現在の状況についての紹介をする。本科研の中で本格的な調査と分析は始めたばかりではあるが、Kristang 語研究の展望についても言及する。

キーワード：言語接触、クレオール化、多民族社会、多言語社会、多様性、多層性、言語の生命力、保存と継承

1. マラッカの言語 Kristang 語、その形成のキー概念

1.1. «Kristang» という自己認識と言語

現地の人々と交わす話題のひとつに、自分自身の定義について語る 2 つの網掛けがある。

ひとつは、「Kristang 語を話す人々」であり、言語を使う、使えることが自己証明となる。もうひとつは、「Eurasians のひとり」であること、である。この場合 Eurasian という語彙を現地で用いる場合、日本で言うユーラシアという意味でなく、「ヨーロッパの血縁を受け継いでいる」、というエスニック的くくりであり²、また、西洋文化、とくにマラッカではポルトガルとの交渉史に影響された彼らの生活様式の特徴を強調する。これら 2 つを結ぶと、「言語・文化的」まとまりを自分自身の内に確認し、またこれは必ずしも否



図1 マラッカ州の州旗

定的・マイナスイメージではないようである。(図1は <https://ja.wikipedia.org/wiki/ムラカ州> から引用。)

¹ 本稿は 2017(平成 29)年 1 月 27 日、東京外国語大学に於いて本科研と日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究(B) (2015 年度-2017 年度、研究課題/領域番号 15H03224)「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」(研究代表者富盛伸夫)との共同開催で行われた、講演会「アジアの少数民族言語の継承と言語教育」で行った筆者の講演「アジアにおけるポルトガル語とその言語・文化の継承 —マラッカの言語 Kristang 語—」をもとに文章化したものである。口頭発表で使用したパワーポイントのコマの動きに沿って進めたので、若干のまとまり性と一貫性に乏しいことをご承知おき頂きたい。

² 現地でエスニシティーを語るとき、その多様性について自然のことと見る態度は、以下のサイトなどでも感じ取れるであろう。https://www.youtube.com/watch?v=BsoI54H_FwY

1.2. ポルトガル語の Heritage:

マラッカの人々が自分の使用する言語に対する名称は多様である。最も一般的な語は **Kristang** であるが、古くはポルトガル語 «Cristão» に由来するといわれ、元々はキリスト教徒（と使用する言語）、日本語で言う「クリスチャン」に近い語感であったと思われる。従って、（前提的にはカトリックの）信徒という意味が残ることは自然であろう。

これに対して、「Portugues di Melaka」（英：Malacca Portuguese）「マラッカのポルトガル語」というフラットな表現も使われる。とはいえ、ポルトガル語、という括りには議論の余地がある。というのも、16世紀以来、マラッカは入植者ポルトガル人から経済的・社会的・文化的・宗教的な上位言語としてのポルトガル語の干渉を受けて成立した言語でありながら、本国からの言語規範は強くは働いてこなかったという。現在も、ポルトガル語の変種である、と言い切るには現地のマレー語や中国語からの影響が顕著である。

後述の Joan Marbeck 女史の好む名称は、「Linggu Mai」（Mother Tongue）「母なる言葉」である。が、これを言語名とするのは不適切な要素が強い。そこで、Papia（「話す」）を付けて «Papia Kristang» あるいは、マレー語（bahasa Melayu）の「言語」を付けて、「Bahasa Serani³」とも呼ばれ、これを Marbeck 女史は著書のタイトルにも用いている。

他には、Bahasa Gerago 「エビコトバ？」という表現が用いられることがあるが、この「エビ語」とは、エビ漁で生計を立ててきたポルトガル系 Eurasian の人々の話す言葉、というほどの意味であろう。しかし、「エビ」にまつわるコンnotation、言外のニュアンスは不明である。なお、話者自身は単に、Portugis 「ポルトガル（系言）語」ということが多い。

2. 研究の経緯と現状

2.1. 本研究の発端

本稿の筆者富盛伸夫がこの分野に深い関心を持ったきっかけは、2012年12月にマラッカを訪問し、Joan Marbeck 女史と出会ったことだった。その1ヶ月前にシンガポールで発行されていた新聞（StraitsTimes）のネット版で彼女に関する記事を読んだ。私は **Kristang** という絶滅の危機にある言語と文化の復興に尽力している Marbeck さんに連絡を取り、マラッカで対面して研究上の関心を話した。日本人が興味を示してくれたことを喜び、その後の研究連携を約束した。

翌年、2013年3月7日、8日、東京外国語大学世界言語社会教育センター主催のシンポジウム「外国語教育と異文化間教育」⁴に Marbeck さんを招聘、**Kristang** 語の保存・継承について議論する

³ 「スラニという語はアラビア語のナスラニ(Nasrani)から由来していて、キリスト教徒のことを指す。しかし、現在のマレー人の用法に従えば、ユーラシアン、すなわち父親がヨーロッパ人で母親がアジア人、もしくは母親がヨーロッパ人で父親がアジア人であり、キリスト教を信仰する人々を意味する。」(引用元、https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/././ciasdp62_43.pdf)

⁴ <http://www.tufs.ac.jp/common/wolsec/symposium.html>

機会を得ることができたともに、そのシンポジウムにマカオから Mario Nunes 氏、ブラジルから Paul Guisan 氏他が参加、研究連携が深まった。

筆者は 2014 年 12 月にクアラルンプールを訪問、現地の Eurasian 協会等での会談を研究計画として具体化する可能性を話した。詳細は後述する。

2015 年 4 月、東京外国語大学の黒澤直俊教授のもとで研究グループが発足、科研費を得て研究活動が推進されることとなった。翌年 2016 年 3 月にマカオ市を訪問しマカオ大学 Nunes 先生らの配慮で本研究についてプレゼンを行うとともに、マカオに合流した Marbeck 氏らと研究連携について会談した。偶然、マカオ市内で現地調査中の内藤理佳氏の知己を得て、マカオの言語文化保存運動を活発に推進しているグループに紹介していただくことができた。

2.2. 先行する研究業績

Kristang 語を言語学的に記述したのはオーストラリア国立大学で博士号を取得したポルトガル語系クレオール言語の専門家 Alan Norman Baxtor 氏で、先行的業績として初の本格的文法書⁵と辞書⁶を編集した。現在はマカオの Saint Joseph 大学他で Kristang 語やマカオの言語 Patuá の研究及び保存復興への活動をしている。

上述のように筆者が初めて指導を受けたのは Joan Marbeck 氏で、彼女は長年の音楽科の教員生活を経て、2000 年頃より自分の言語と継承文化の復興に強い関心をもって Kristang 語の詩歌作品を発表、並行して、会話文集、語彙集、文法の手ほどきなどの実用書を出版している。

言語学分野のでアクティブな研究者としては、クアラルンプールにあるマレーシア最高学府マラヤ大学の英語学専攻で教鞭をとる Stefanie Pillai 氏をあげる。彼女は学生とともに言語学的なフィールドワークを定期的に行い、アーカイブとして音声資料や会話文コーパスを公開している。

2.3. Kristang 研究の範囲：なぜ Kristang 語をとりあげるのか？

筆者は教職にある間は言語学担当として一般言語学およびロマンス言語学分野で仕事をしてきた。特に、フィールドとしてヨーロッパ・アルプス周辺の言語・方言を記述研究する中で、スイス・ロマンシュ語の危機と復興の現状に接するにつれ、言語 (langue) としてのまとまり性、自立性を分析することに関心をもった。言語がその生命力を失いかけた時、当事者としての話者意識や言語 (教育) 政策に関わる多様な要素に注目するようになった。その関心から、スイスをはじめとする多言語社会のせめぎ合いの中で、消滅の危機にある少数者の言語・文化に寄り添うことの研究者のジレンマを感じることは少なくなかった。

これをきっかけに、ヨーロッパの少数者言語の保存と継承の問題に関心を深め、さらに研究活動を広げ、世界の他の地域の少数者言語への理解と研究の動機づけを深め、上述の経緯もあり、マレーシアやシンガポールに継承される Eurasians の言語と文化を対象とすることで、少数者言語・文化

⁵ Baxter, Alan, N., *A grammar of Kristang: (Malacca Creole Portuguese)*, Australian National University, 241p., 1988.

⁶ Baxter, Alan, N. and Patrick de Silva, *A dictionary of Kristang: (Malacca Creole Portuguese) : with an English-Kristang finderlist*, Canberra : Pacific Linguistics, 151p., 2004.

と共生する複層的な社会での言語の維持と多様性の保全に関する視点を強めてきたといえる。この方向性は CEFR の導入研究を並行して行う中でも、言語教育における学習行為の多層性を取り込む方法論的な試みに繋がっている。

3. マラッカの言語 Kristang 語形成の背景

3.1. 交易都市マラッカの繁栄

本稿では Kristang 語が使用されている主なマレーシアの都市をマラッカと呼んでいるが、マレーシアでは Melaka 「ムラカ」が一般的で、マラッカという日本語での呼称は英語 Malacca による。ムラカ州（マラッカ州）の州都であるマラッカは言うまでもなく、マレーシアの主要な港湾都市でマレー半島西海岸南部に位置し、東西交通の要衝マラッカ海峡に面する。この地理的特質は、港市としてのマラッカの繁栄を保証する諸条件が揃っていた。すなわち、石井米雄によれば⁷、関税の規則



図2 マラッカの地理上の優位性

性、紛争解決手段の整備など、船舶航行の安全を保障するためのパトロール機能、積荷売り捌きのための市場、帰路の積荷とする魅力的商品集荷の便宜、風待ち期間中の倉庫設備などである。

15 世紀のマラッカ王国の支配領域には約 5000 人が居住し、我が国との関係をみると東南アジアの王国と琉球王国間の公式な外交船の行き来は、1424 年から 1630 年の間で 150 回、内 10 回はマラッカ行のものだったという記録が残っている。ヨーロッパ人が到来する前にすでに琉球王国とマラッカ王国の間には交易関係があり海洋交易によって繁栄していた。16 世紀初頭には人口 10 万人を数えていたと

いうことである⁸。

3.2. ポルトガル人の進出と入植

1510 年、ポルトガルはインドのゴアを拠点化し、1511 年、武力でマラッカを占領する。これが東南アジアのポルトガル植民地化の始まりとなるが、現在まで保存されているポルトガル人の築いた砦や砲台、またキリスト教会などをみると当時の繁栄が容易に想像される。それまで支配していたマラッカ王国のスルタン（王）は、現在シンガポールに接するマレー半島先端のジョホールに移る⁹。

支配者ポルトガル人たちの勢力は明統治下の中国に及び、1517 年には広州と交易、1527 年には広州に近いマカオに居住権を獲得した。1529 年に締結された有名なサラゴサ条約により、アジアにお

⁷ 石井米雄、「港市としてのマラッカ」『東南アジア史学会会報』53号（東南アジア史学会、1990年）、p.9.

⁸ 図2は、https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/d/d9/Malaysia_-_Location_Map_%282013%29_-_MYS_-_UNOCHA.svg による。

⁹ 鶴見良行、『マラッカ物語』、時事通信社、pp.108-140、1981.

けるポルトガル・スペイン両国の境界線が設定されたが、1543年ポルトガルの商船が種子島に漂着して以来、日本との接触も始まり1550年には平戸に商館を設置するなど、九州の諸大名との交渉が深まった。なお、鹿児島出身のヤジロウ（アンジロー、池端弥次郎重尚）とザビエル（1506年4月7日ナバラ王国生まれ、1552年中国・広東省で没）が出会い、日本布教のきっかけとなったのもこの頃のことである。

当時から、支配階級として現地に赴くヨーロッパ人男性は単身での赴任がほとんどで、ポルトガル人と現地女性の民族間結婚が一般的で、その子孫とさらに現地の人との婚姻が進み、言語・文化・生活慣習が混交して、Eurasians の概念が形成されるようになった。



図3 マラッカ州の紋章

オランダのマラッカ占領は1641年、以来、オランダ植民地となる。これに伴い交易の中心地がバタヴィアに移管され、マラッカは国際交易都市としての重要性を失うこととなった。英蘭協約が1824年にあり英国の言語・文化が浸透する。また、一時的に日本による占領が1942-1945年にあった後、マラヤ連邦が1948年に成立した。現在のマラッカの人口は77万人とされている。（左の図3は <https://ja.wikipedia.org/wiki/ムラカ州> から引用。）

4. マラッカの言語 Kristang 語の言語的特徴の概要

以下に、Joan Marbeck, *Kristang Phrasebook*, 2004. を引用して、Kristang 語の概要を紹介したい。Kristang 語を母語のひとつとし、その啓蒙家として文法を直観的にまとめた Marbeck 氏の意図は、ポルトガル語ともマレー語とも違って映る部分を取りあげようとしていると考えられるので、それを留意してご覧いただきたい。

4.1. Kristang 語の音声資料 “Kristang or Portuguese?”

< a >	as in ma, pa	<i>Kazab, kriab</i>
	as in about, around	<i>forsu, obru</i>
< e >	as in friend, end.	<i>kebrab, kangka</i>
	as in leg, head	<i>fazab, teng</i>
< i >	as in bit, sit	<i>eli, asi</i>
< o >	as in boat, goat	<i>logu, abu</i>
	as in oar, lord	<i>alab, adi</i>
< u >	as in flute, parachute	<i>pekady, dedu</i>

表1 Kristang 語の母音

音声についてのまとまった研究はまだなされていないのが現状であるが、上に紹介したマラヤ大学の Stefanie Pillai 氏による音声アーカイブが音声資料からの文字起こしがなされていて、貴重である。

Stefanie Pillai, Transcript of audio recording mpc02@ELAR, SOAS Archive
<https://elar.soas.ac.uk/Record/MPI579411> “Kristang or Portuguese?”

4.2. Kristang 語の文法組織：代名詞

マレー語には一般的でない人称体系がポルトガル語のカルクによって Kristang 語では存在すると
 言っている。

Pronomi / Pronouns

Personal Pronouns:

<i>Yo</i>	- I	- me
<i>Bo, Bos</i>	- You	- you
<i>Eli / Akeli</i>	- He, She, It	- him, her, it
<i>Nu, Nus</i>	- We	- us
<i>Bolotu, Bolotudu</i>	- You	- you
<i>Olotu</i>	- They	- them

表 2 Kristang 語の人称代名詞

4.3. Kristang 語の文法組織：所有代名詞？

上層言語のポルトガル語の組織とは異なり、人称代名詞に機械的に -sa を付加することにより、
 ポルトガル語の所有代名詞、形容詞が生成される。

Possessive Pronouns: Add 'Sa'

<i>Yo sa</i>	- My, mine
<i>Bos sa</i>	- Your, yours
<i>Eli sa / Akeli sa</i>	- His, Her, his, hers / its
<i>Nus sa</i>	- Our, ours
<i>Olotu sa</i>	- Their, theirs

表 3 Kristang 語の所有代名詞、所有形容詞

4.4. Kristang 語の語形成：形態素の反復 > 程度の増幅

Kristang 語では、マレー系の言語に多く見られる形態素の反復により、意義の拡張や文法プロセス
 が実現されることが特徴的である。日本語を含め、東アジア、東南アジア諸語にも部分的に共通し
 た造語的形成と言える。

Word duplicating for plurals		
e.g.	<i>cabi-cabi</i>	- keys
	<i>fruta-fruta</i>	- fruits
	<i>ancla-ancla</i>	- rings
	<i>riu-riu</i>	- rivers

表 4 Kristang 語の形態素の反復 > 複数化

Word duplicating in adjectives and adverbs		
e.g.	<i>miora-miora</i>	- frequently, intermittently
	<i>forsa-forsa</i>	- forcefully, strongly
	<i>moli-moli</i>	- gently
	<i>grandi-grandi</i>	- very big
	<i>keninu-keninu</i>	- very small
	<i>unga-unga</i>	- individually
	<i>dos-dos</i>	- in pairs
	<i>tres-tres</i>	- in threes

表 5 Kristang 語の形態素の反復 > 程度の増幅

4.5. Kristang 語の文法組織: 動詞は「時」で形態変化しない

この言語は話者主観における「時」を表現する文法プロセス、いわゆる「時制」体系はないと言ってよい。発話時の必要性に応じて、「時」を指示する小辞を添加する。ここでは「時制」「法」「アスペクト」に相当する小辞を Marbeck 氏はあげている。

<i>Patifalah-patifalah</i> / Particles		
<u>The Tense - Mood Aspect Particles</u>		
e.g.	<i>Jah</i>	- Past
	<i>La/logu</i>	- Future
	<i>Ta</i>	- Continuous

表 6 Kristang 語の動詞添加の小辞

動詞の前に「小辞」を先行させて「時・アスペクト」を示す。下は「過去の時」の例。

動詞「する」 *fazer*, 'to do'

I do it – Yo *fazeh eli*

You do it – Bos *fazeh eli*

We do it – Nus *fazeh eli*

I did it - Yo *ja fazeh eli*

You did it – Bos *ja fazeh eli*

We did it – Nus ja fazeh eli

4.6. Kristang 語の文・日常表現

Kristang 語の日常的な表現は強くポルトガル語由来の文構成・語彙が保たれている。上位言語としてのポルトガル語のプレゼンスを感じ取れるのではないだろうか。

<i>Rekada & Katasia</i>	
<i>Bong pamiang</i>	- Good Morning
<i>Bong dia</i>	- Good Morning, Good Day
<i>Bong atadi</i>	- Good Evening (This is seldom used)
<i>Bong anoti</i>	- Good Night
<i>Kaiya? Teng bong?</i>	- Hi, how are you, All is well?
<i>Oi, Amboi!</i>	- Wow! Fancy!
<i>Oi, teng bong? Jah kumih?</i>	- Hello, everything's okay? Have you eaten yet? (less formal and frequently used)
<i>Mutu merseh</i>	- Thank you
<i>Mutu grandi merseh</i>	- Thank you very much
<i>Da nada</i>	- Nothing at all, you are welcome
<i>Dah rekada</i>	- give my compliments, my regards to
<i>Dah boka</i>	- to kiss
<i>Dah mang</i>	- to shake hands, to congratulate, to wish

表 7 Kristang 語の日常表現

5. Kristang 語は危機言語か？ユネスコの評価

言語が消滅の危機にあるという場合、言語人口をまず参考にすることが多い。しかし、話者数がある程度少なくとも必ずしも危機にあるというわけではない。アマゾン川流域に孤立した生活を営む「ピダハン」と呼ばれる人々は、300人程度の話者数でも完全に完結した生活圏内で言語・文化が伝承されてきた。（もともと、ブラジル政府の少数民族支援の様々な方策により開発と「文明開化」が急激に進む現在は、危機にある言語と言ってもよいだろう。）

下の図4は、ユネスコが定義した危機言語の評価基準（EGIDS）による Kristang 語の位置づけである。赤い点の位置は、8a から9の「死にかけている」という評価となっている¹⁰。

¹⁰ Red=Dying (EGIDS 8a-9) – The only fluent users (if any) are older than child-bearing age, so it is too late to restore natural intergenerational transmission through the home; a mechanism outside the home would need to be developed. The EGIDS level for this language in its primary country is 8a (Moribund) – The only remaining active users of the language are members of the grandparent generation and older. (<http://www.ethnologue.com/18/cloud/mcm/>)

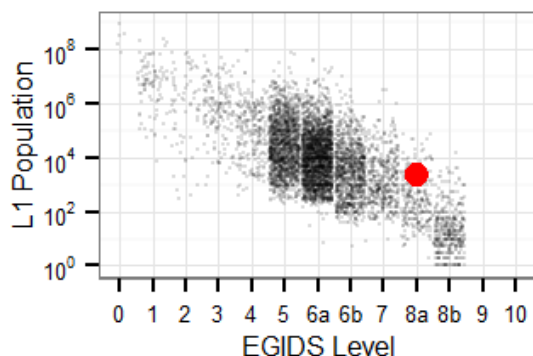


図4 ユネスコによる危機言語認定

ユネスコによる危機言語認定については、宮岡伯人他編 『消滅の危機に瀕した世界の言語』 (明石書店 2002 年) が簡略的に紹介している。

〈付表1〉 言語の危機度：Krauss (1992a)

- ①「絶滅寸前の」(moribund) 言語。子供がすでに母語として習得しなくなった言語=20~50%
- ②「消滅の危機に瀕した」(endangered) 言語。子供がまだ母語として習得しつづけているが、現状では21世紀末までに①になる可能性ありと考えられる言語=40~75%
- ③「安泰な」(safe) 言語。将来にわたって確実に話されつづけるだろう言語=5~10%

また、UNESCO Atlas of the World's Languages in danger (<http://www.endangeredlanguages.com/>) や, Ethnologue のサイト (<http://www.ethnologue.com/endangered-languages>) を参照されたい。



図5 ユネスコによる言語の生命力

6. ポルトガル系言語・地域社会の比較研究へ

6.1. ポルトガルの Heritage: 3つの地域の比較研究

ポルトガルが旧アジア植民地に残した遺産 (Heritage) は大きくまとめて3つの地域に集約される。なかでもマカオの社会学的、言語社会学的な観察を現地調査を元に続けている内藤理佳氏は

「アジアのポルトガル人子孫コミュニティの歴史と現状 —マカオ・マラッカ・スリランカの事例から—」の中で¹¹、類似性のなかでも著しい差異をそれら3つの地域の間認めようとしている。

本稿ではそのような現地情報に乏しい資料の中で、将来の比較研究に備えて、当面、マラッカのケースのみを上げておこう。連携協力により、少なくともマラッカとマカオについては2点観測が可能ではないかと期待する。従って当面は、以下の表ではマカオについてはあえて記入しないこととする。

	マラッカ Kristang	マカオ Maquista
ポルトガル本国との関係	500年近く関係が薄い	
言語人口	500人～2200人(2015年、Ethnologue) Portuguese “Eurasians”	
話者世代	大半が70歳代以上+児童単言語話者は稀、 多くが複言語話者	
他言語との接触	マレー語(地域変異あり)、英語、中国語など	
使用地域	マラッカ居住地区(約100戸)、他にシンガポール(100人)など	
言語の生命力	Moribond(終焉に近い)	
規範性	不明または薄い	
言語リーダー	ごく少数	
言語的求心力	希薄	
研究状況	1980年代から記述研究	
文化活動	数年ごとに歌やダンスのイベント	
料理の伝統	マラッカ・クアラルンプール、 シンガポールに数軒ずつ	
公的援助	極めて不十分	
言語教育	公的な制度なし	
保存・継承活動	まだ少数のみ	

¹¹ In Bulletin of the Faculty of Foreign Studies, Sophia University, No.50 (2015) 1
(http://dept.sophia.ac.jp/fs/_fstest/wp-content/uploads/2016/03/12内藤理佳.indd_.pdf)

7. 現地研究者との連携協力の期待

以下に富盛が2014年11月25日にJoan Marbeck氏に送付した連携についての提案の骨子をここに紹介し、今後の研究協力につなげたい。

* * *

Mutu grandi Merseh, Dear Joan, (25 Nov 2014)

CC: Professor Stefanie Pillai, Prof. Kurosawa, Prof. Nomoto (TUFS),

Let me make some propositions:

1. to launch a scientific research cooperation link, creating a kind of international study group of Eurasian Studies (including Japan)
2. to look for a or several grant aids to promote its activities.
3. to have an international meeting or a symposium to exchange local studies and to publish its attainments.
4. to keep contact with academic and scientific societies of relevant countries.

The objectives of our project consist of

1. The linguistic documentation, and descriptive study of language contact involving languages of European origin (LEO) in South-East Asia. This would include the study of deriving linguistic variations of local languages and overlapped languages of LEOs over several centuries. In this preliminary phase, our research project, in its out-reach, would identify the characteristic [salient?] properties of the historical and cultural environment of South-Eastern Asia.
2. Particular focus on the geo-linguistic areas of greatest importance to the study, namely the Kristang language in Malaysia, and other Portuguese- and Spanish-based Creole languages in Macao, the Philipines and Vietnam (FRENCH-DERIVED CREOLES IN VIETNAM?). This will enable an analysis of the issues of linguistic and cultural legacy today in the communities that have inherited these languages.
3. The identification, with the collaboration of local researchers and relevant native speakers (AND ALSO COMMUNITY LEADERS, INSTITUTIONS AND CULTURAL 'STAKE-HOLDERS', e.g. - in the case of Kristang, SAFTEA and Mrs S. de Costa?), of the dominant factors determining the possibilities for valorisation, maintenance, and revitalization of linguistic and cultural legacy in those same communities. To this end, we will examine [PAST AND PRESENT] initiatives towards the implementation of Kristang-language education, as well as the influence of cultural activities on attitudes towards, and use of, that language.

8. Kristang 語の復活に向けて：「目覚めよ！Kristang 語！」運動

Marbeck 氏からの情報で、Kristang 語の話者数がごく少数のシンガポールで、若い研究者・活動家がいることを知った。筆者はまだ会う機会をもてていないが、この Kevin Martens Won 氏は 2014 年にシンガポールで 14 人のネイティブ話者から聞き取りを始めた、という。当時シンガポール国立大学在学中で、みずから母語ではないものの Kristang 語を習得し高度に習熟していると見受けられる。すでに、Kristang 語講習会を開催している他、各種の文化活動を展開している。

とりわけ 2017 年 5 月にはシンガポールにおいて、彼のグループは Kristang 語・文化の保存・復興に向けて大きなイベントを企画していると公表しており、Marbeck 氏はじめ現地の Kristang 語復興運動関係者は大きな期待を寄せている。特に Kevin M. Won 氏とその仲間たちの熱意と持続的な活動に注目したい。消滅の危機に瀕していると認定されているとは言え、若い世代の働きが趨勢を変革する力となることへの希望を持ち続けたい。

Kevin M. Won 氏の活動や、イベント・プログラムについては以下のとおりの URL であるので、参照されたい。

The Kristang Language Revitalization Plan Phase One 2016-2017 By KEVIN MARTENS WON
(NUS) (<https://kodrahkristang.files.wordpress.com/2016/07/kaminyu-di-kodramintu-v1.pdf>)
<https://storyofkristangpanel.peatix.com/>
<https://festa.2017.kristang.com/Festa%20Programme%20Booklet.pdf>
<http://www.endangeredlanguages.com/lang/1459/samples/10306>

9. まとめ：本科研から研究展望へ

3 年間の研究期間の間に多くの反省材料があるが、以下では、今後の研究の進展にとって望ましい事項を箇条書的に記しておきたい。

- (1) 現地の動向と距離を置かないこと：研究と継承活動への部分的参加
- (2) 研究情報の収集と公開：データベース化とアーカイブ構築
- (3) 可能な限りフィールド調査に赴く：言語記述の研究はすでに手遅れか？
- (4) 学際的な研究分野を開拓する：持続的な研究継続
- (5) 研究集会の開催と成果公開：Web サイトの構築と持続

* * * * *

<参考文献・関連サイト一覧>

- Baxter, Alan N. 1988, A grammar of Kristang (Malacca Creole Portuguese) (Pacific linguistics, Series B. Monographs ; no.95), Dept. of Linguistics, Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Baxter, Alan N. and Patrick de Silva, 2004, A dictionary of Kristang (Malacca Creole Portuguese) : with an English-Kristang finderlist, Pacific Linguistics, Research School of Pacific and Asian Studies, Australian National University.
- Cardoso, Hugo C. , Alan N. Baxter, Mário Pinharanda Nunes (ed), 2012, Ibero-Asian Creoles : comparative perspectives, John Benjamins.

Hancock, Ian, Papia Kristang: The Creole Portuguese of Malacca and Singapore,
<https://www.kreolmagazine.com/arts-culture/history-and-culture/papia-kristang-the-creole-portuguese-of-malacca-and-singapore/#.WlhjzbF3zxI>

Kantah Kristang: Marelu (Cover of Yellow, by Coldplay)
<http://www.endangeredlanguages.com/lang/1459/samples/10306>

Nunes, Mario Piharanda, The Use of Kristang in the Portuguese Settlement of Malacca,
<https://ajba.um.edu.my/index.php/JML/article/download/3825/1717>

Papia Kristang at Ethnologue (18th ed., 2015), <http://www.ethnologue.com/18/cloud/mcm/>

Pillai, Stefanie, Wen-Yi Soh, Angela S. Kajita, 2014, Family language policy and heritage language maintenance of Malacca Portuguese Creole, *Language & Communication* 37 (2014) 75–85, Elsevier.

Won, Kevin Martens, <http://www.straitstimes.com/singapore/dying-tongue-kristang-gets-new-lease-of-life>

Won, Kevin Martens (NUS), <http://www.endangeredlanguages.com/lang/1459/samples/10306>

* * * * *

本稿は科学研究費助成事業基盤研究(C)「東南アジア語圏におけるヨーロッパ系言語との接触・混成現象に関する動態的記述研究」(2015年度—2017年度、研究代表者:黒澤直俊)の研究成果のひとつとして公開するものである。